

Sports Aikawa

スペシャル1

スポーツ協会創立50周年記念講演会開催決定！ マラソン界伝説のランナー 瀬古 利彦さん登場！

(株)ディー・エヌ・エー フェロー/DeNAランニングアカデミー育成アドバイザー

「心で走る ～マラソンリーダーからの提言」

11/16(日) 午後2時15分～ 会場: 愛川町文化会館 入場料: 500円



瀬古 利彦(せこ・としひこ)

1956年、三重県生まれ。高校時代から本格的に陸上を始め、インターハイでは800m・1500mで二年連続二冠を達成。

早稲田大学へ進み、故中村清監督のもと、ランナーとしての才能を開花。箱根駅伝では4年連続で「花の2区」を走り、3、4年次では区間新(当時)を獲得するなど、スーパーエースとして活躍した。

トラック・駅伝のみならず大学時代からマラソンで活躍し、国内外のマラソンで戦績15戦10勝。圧倒的な強さを誇る。

現役引退後は指導者の道に進み、オリンピック選手を3名輩出するなど後進の育成に注力。

2016年より日本陸連マラソンリーダーとしてマラソングランドチャンピオンシップ(MGC～五輪日本代表選考会)設立に奔走。2019、2023年のMGCを成功に導いた。

現在、(株)ディー・エヌ・エーのフェローとして活躍中。全国のランニングイベントでのゲストとしてマラソンの普及に努めている。

講演会 申込方法

10/1(水)～15(水)に、電子申請(e-kanagawa)またはメール、電話、FAXで代表者の氏名、住所、連絡先(メール・電話)、人数(最大5名)を協会事務局(下記枠内参照)へ。※募集人数100名・応募多数の場合は抽選。当選の連絡を受けた方は、10/22(水)～11/14(金)に、協会事務局でチケットを購入。※購入時に座席指定。申込状況により追加販売あり。



スペシャル2 会長三代 ～歴代会長座談会～ 2～3面

スペシャル3 町出身! “Z世代選手” インタビュー 田中 幹也選手 4面 牧野 謙心選手

編集／発行 ◆愛川町スポーツ協会啓発宣伝委員会 発行責任者◆愛川町スポーツ協会会長
協会事務局 ◆愛川町角田251-1 愛川町役場 教育委員会スポーツ・文化振興課内 電話◆046-285-6958
メール◆spobun@town.aikawa.kanagawa.jp FAX◆046-286-4588 (平日8:30～17:15)
SNS◆@spobun_ka(X、Instagram、Facebook) 発行日◆2025/9/15 発行部数◆10,000部(全戸配布)

会長三代

スペシャル2 ～歴代会長座談会～

①スポーツとの関わりと在任中のエピソード

吉岡 本日は、2014年以降の歴代会長に、愛川町スポーツ協会（以下「スポーツ協会」）の歩みや今後の役割について、ざっくばらんにお話いただければと思います。初めに自己紹介をお願いします。

齋藤 2014年から4年間会長を務めました。自身は町のサッカー協会の設立(1981.3)に力を注ぐとともに、少年サッカーの指導を継続しています。ボール1つで遊べるサッカーは、子どもを育て、大人を紳士にし、子どもに戻す力がある一そんな魅力あるスポーツです。ちょうど会長をお引き受けした任期中(2015年)に協会創立40周年を迎えるということもあり、一瞬「大変だなー」という思いが頭をよぎりましたが、創立40周年記念事業を協会一丸となって進めました。大変でしたが、招待者から「小さい町でこんなにしっかりした事業ができるとは思わなかった」と驚かれ、役員同士のチームワークの力を感じ、誇らしい思いがありました。サッカー同様に仲間とつながって成し遂げる楽しさが、記念事業にはあったと感じています。

榎本 2018年から2年間会長を務めました。子どもの頃からソフトボール、バレー、テニスなど、勤め先や地域でスポーツに関わってきました。特に、町のソフトボール協会には長年携わり、個性豊かな仲間とともに協会運営に尽力し、今も高齢者のソフトボールチームに登録しています。スポーツ協会会長としては短い期間でしたが、次代へとつなぐ「橋渡し役」を意識して、協会運営に当たりました。

古座野 2020年から会長を務めています。野球一筋で育ち、プレーヤー出身としては初めて町の野球協会の会長となりました。スポーツ協会会長に就いたのはコロナ禍の最中。最初の2年は、駅伝・スポレクなど様々な事業が中止となり、制限下での活動を余儀なくされる中、できることを模索し、町出身や町に縁のあるアスリートたちの声を集めて発信するため、情報誌の号外を発行しました。名称が「体育協会」から「スポーツ協会」へ変わったのが2021年。時代の変化を体感しつつ、マナーの徹底、町のスポーツ施設の利活用など、スポーツができる環境を守ることに力を入れています。

②スポーツ協会が果たしてきた役割

吉岡 スポーツ協会の50年を振り返って、どのような役割を果たしてきたと考えられていますか。

齋藤 スポーツは「楽しむ」ことが前提で、「またやりたい」と思えることが魅力です。スポーツ協会の役割は、各種目協会のスポーツを理解し、種目を超え「楽しさ」が感じられる場を支え続けることです。1996年に完成した三増公園陸上競技場は、天然芝でサッカーができ、今も多く活用していますが、他所から来たチームは天然芝にすごく喜びます。歴代の役員が各協会からの要望をまとめ、優先順位を付け町に要望し、様々な施設が改善・設置され、スポーツ環境が整備されてきました。協会の50年の役割は、極めて高いものがあります。



さいとうますお
齋藤増雄元会長(5代)



えのもとてるお
榎本照夫前会長(6代)

吉岡 それぞれの種目で詳しい方がいらっしゃいますから。細かいところも要望できるということですね。

齋藤 孫の手じゃないけど(笑)痒い所にも届いたりして。

榎本 三増公園は自然にも恵まれた中でスポーツができ、良い場所に作ってもらったと思います。オープンした1号公園多目的広場も、色々な種目に利用されれば良いと思います。

古座野 1989年に完成した田代運動公園野球場は、硬式の野球場で、オープンして愛川の野球が変わりました。プロ野球の選手も呼んで、非常に活気づきました。他所のチームには、良い球場ですぬって褒められます。バックも山ですから(笑)

齋藤 ロケーションが素晴らしいです。

古座野 私が野球協会の会長になってからは、田代運動公園で大会の準決勝・決勝戦を行っていて、皆さん喜んでます。要望を出していた野球場ラバーフェンスの改修は、昨年度、スポーツ振興くじ助成金も活用して実施され、非常に綺麗にいただきました。

吉岡 町と協会の信頼関係があったからこそ、施設も充実してきたように思います。

古座野 スポーツ協会は、町のスポーツ環境を守る存在。各々の立場を汲み取って、みんながスポーツを楽しめる環境を整えることが、本質的な役割だと思っています。



③愛川町のスポーツの課題、今後の可能性

吉岡 愛川町におけるスポーツの課題は何でしょうか。

古座野 各協会の会員が減少しています。野球でいうと、20年前は60以上あったチームが今は半分以下になりました。

齋藤 スポーツだけの課題ではないかもしれませんが、自分たちで場面設定をしようとする人が少なくなりました。子どもたちはコーチと一緒に準備や整備をきちっとしますが、大人は億劫になるのか…「楽しむ」ために何が必要かということが大事なんです。

古座野 また、指導者も増やしていかなければと思っています。

齋藤 良い選手を育てるためには、指導者自身も努力し、資質を上げていく必要があります。少年サッカーのチームの中でも、指導者の資格を取って資質を上げ、子どもたちに還元しています。



ここのきみお
古座野君夫会長(第7代)



ファシリ よしおかなとみ
テーター 吉岡去私理事長

古座野 野球の審判も減っていて、若手の育成が急務だと思っています。若い協会員にも審判の資格を取っていただいています。

榎本 ソフトボールも審判のなり手が少なく、高齢になっても続けている方が結構います。この前の試合で塁審をされていた方も高齢で、ライナーが当たって心配になりました。

吉岡 審判もそれなりの数がいないと困りますね。

齋藤 サッカーも計画的に取るようにしています。資格を取るだけでなく、フェアプレーの精神を徹底しなければ…審判には経験や勇気も必要で、選手や監督も審判をリスペクトする必要があります。

吉岡 スポーツマンシップが大前提ですね。それでは、愛川町のスポーツに可能性を感じるころはありますか。

古座野 テレビでも取り上げられていますけど、愛川町は外国人の住民が非常に多く、子どもも結構な数だと思います。スポーツに外国人の住民を受け入れている事例はありますか。

齋藤 南米から日系人の方がたくさん来られた時、彼らにとってはサッカーが生活の一部なので、愛川町でもサッカーをやりたいと、リーグに加盟してもらいました。今は途切れてしまっていますが、一緒にやってみると、サッカーの質が全然違う。また、少年サッカーには今、様々な国籍の子どもがいます。外国人と色々なコミュニケーションができることは、スポーツをする大事なポイントだと思います。

吉岡 違うのは国籍や言語だけです。

齋藤 子どもは学校に行くと日本語を覚えるし、友達がサッカーをしていれば、自分もやりたいと親に話すと思うんです。今日相談に来た外国人は、親は週末に仲間同士でサッカーを楽しんでいて、子どもにも楽しませたいという発想です。受け皿になることは大事です。

古座野 時代も変わって、野球協会の学童部には女子も多く、男子より上手い子もいます。近隣では女性の審判員もいて、女性チームも作られている。女性の活躍も期待したいです。

齋藤 もう一つは、スポーツをする場所が多くあること。学校開放が上手く機能しています。借りる方もルールを守って、施設が維持されていけば、まだまだ愛川町でも、スポーツを存分に楽しんでいけると思います。

④未来の人材を育てるには

吉岡 私が携わるスキーでは、中学や高校まで一生懸命やっていますが、その後が続かない人が多い印象です。未来の人材を育てるためには、どうすれば良いと考えていますか。

齋藤 スポーツが人にもたらすものは大きいので、スポーツを通じて学んだことが、社会人になってからの糧になれば良いと思います。その後、応援者になったり、少年サッカーだと、OBが指導者として帰ってきたり、卒団した子が親になって子どもをチームに入れたり、そんなケースもだいが増えました。

吉岡 歴史があるチームは、そういった流れもできてきますね。

齋藤 目先のことでなくて、長い目で捉えたいです。繰り返になりますが、「楽しむ」ことが前提で、キーワードです。そうした中で、スポーツ協会は、レクリエーションや軽スポーツ団体も含めて構成していることが特徴であると思います。これは素晴らしいことで、スポーツを広く捉えるということも大事だと考えています。

古座野 昨年のスポレクはこれまでで最高の人出で、大勢の方に楽しんでいただきました。今後も、各種目協会に盛り上げていただいて、こうした基盤を維持していきたいです。もう一つは、子どもが伸び伸びとスポーツができる環境を守っていくこと。今、中学校の部活動のあり方について検討されていますが、少子化や指導員の確保、教職員の負担など、様々な課題があることを感じています。

齋藤 子どもが体を動かす場所は、無くてはならないもので、中学校の部活動もその一つだと思います。近隣では、サッカー部をクラブが指導しているところもあります。地域のスポーツ団体やスポーツ協会が果たす役割は、今後高まっていくものと考えています。

⑤次世代へのバトン。未来に伝えたいこと。

吉岡 最後に、次世代に残したいことや若い世代に望むこと、未来に伝えたいことなど、お話をいただければ。

古座野 昨年のスポレクに元プロ野球選手の村中恭兵さんをお呼びしました。村中さんがボールを投げた時、投げ方もスピードも違うから、子どもたちが「すごい！」と驚いていたのを見て、一流アスリートとの交流を図っていくことは大事だと思いました。それと、色々な種目を体験する中で、私は走るのが得意だなとか、この子は蹴るのが得意そうだなとか、長所を見出すことも大事です。スポレクは今後もスポーツ協会が担い、続けて欲しいです。



榎本 若い頃、地域の先輩たちと機械を持ち寄って、草刈りや整地をし、ソフトボール場を整えた経験は、スポーツに携わる自身の原点です。地域で大切に管理してきたことも含め、歴史を伝えていきたいです。

齋藤 スポーツの語源はラテン語で、「日々の生活から離れる」といった要素を指します。「仕事を離れて楽しくスポーツをしよう」ということです。以前、故・岡野俊一郎さん(元JOC役員・元日本サッカー協会会長)の講話で、スポーツは生活に無くてはならないものの一つで「スポーツ文化である」という話を聴きました。愛川町は「町民みなスポーツの町宣言」をしています。これからもスポーツが町民の身近な文化として、子どもも大人も、男女も関係なく、「スポーツに親しんでいこうよ」という思いで、各種目協会が頑張って活動を継続して欲しいです。あまり大きな組織ではないので、コミュニケーションも行き渡りやすいし、そうした点も重視して運営してもらいたい。50周年がスポーツをみんなで楽しんで行けるような、もっと良い町にしていこうというきっかけになれば嬉しいです。

吉岡 貴重なお話をありがとうございました。今後も、会長や役員と協会運営をしっかり行います。これからもご指導よろしくお願ひします。



スペシャル3 町出身！“Z世代選手”インタビュー



©中日ドラゴンズ

たなか みきや
田中 幹也 選手(24)
(中日ドラゴンズ)

愛川町中津出身。「中津リバーズ」で野球を始め、東海大菅生高、亜細亜大を経て、2023年ドラフト6位で入団。2024年、開幕スタメンの座をつかみ、3年目の今季は二塁手としてレギュラーに定着。「令和の忍者」と呼ばれ、スーパープレーを連発する守備と、足の速さが持ち味。

Q1. 野球を始めたきっかけと魅力

父が野球をやっていたので、その影響です。魅力は、ピッチャーなら三振を取った時、バッターならホームランを打った時、その気持ちよさだと思います。

Q2. プレーで大切にしていること

楽しくやることです。「つまらない」と思ったら終わりなので、楽しんでやっています。

Q3. 愛川町で影響を受けた人物

ヤクルトのピッチャーだった村中恭兵さんです。同じ「中津リバーズ」出身で、子どもの頃は村中さんみたいになりたいと思って野球をやっていました。

Q4. 自身のターニングポイント

大学4年生の春に日本一になり、MVP(最高殊勲賞選手)を取りました。「もしかしたらプロを目指せるのかも」と思い始めた頃です。子どもの頃からプロ野球選手になりたかったのですが、現実問題として「難しいな」と思っており、社会人野球を目指していました。MVPを取ったことが、自身のターニングポイントになっていると思います。

Q5. なぜプロ野球選手になったんですか？ また、プロになった今の夢は？

プロ野球選手になったのは、カッコいいからじゃ

ないですか？カッコいいと思って見ていたので。今の夢は、ドラゴンズで日本一になることです。

Q6. 中津リバーズ時代の練習メニュー (週何回？素振りはどのぐらい？)

最初にランニング2周、キャッチボール、ノックして、バッティングして…そんな感じで週2回(土日)練習がありました。素振りは遊んで帰って来た後、ご飯を食べる前に毎日30分ぐらいしていました。

Q7. ファインプレーをする時には、 どのようなことを考えていますか？

入ってくれ～、投げる時もアウトになってくれ～と。あまり考えてないです。

Q8. 子どもたちへのメッセージ

子どもの頃は、いっぱい遊びました。素振りと宿題は欠かさずやっていましたが、家に帰ってカバンを置くと、すぐに校庭へ戻って遊んでいました。みなさんも、いっぱい外で遊んで、いっぱい勉強して、毎日楽しく元気に過ごしてください。



©中日ドラゴンズ

選手名鑑
田中幹也選手



中日
ドラゴンズ



このマークが付いているのは中津リバーズ・現役部員からの質問です！

©SHONAN BELLMARE FUTSAL
/Keisuke ISHII



まさの けんしん
牧野 謙心 選手(23)
(湘南ベルマーレフットサルクラブ)

愛川町中津出身。「ハリマオSC」でサッカーを始め、「P.S.T.Cロンドリーナ」に加入後、中学生から本格的にフットサルに取り組む。2020年、Fリーグトップチームに昇格。2021年にはフットサル日本代表候補に選出される。相手のボールを奪う、アグレッシブなディフェンスが持ち味。

Q1. フットサルを始めたきっかけ

小学生の時、同じチームだった甘利斗亜選手(Fリーグ・フウガドルすみだ)に誘われ、湘南ベルマーレフットサルクラブの試合を見に行ったこと。初めはサッカーとフットサル両方やっていました。中学生の時、フットサルの方が面白いなと思って、高校生からはフットサル一本で、今に至ります。

Q2. フットサルの魅力

試合展開がとても速くて、見ていても飽きません。小学生の時には、トップチームの選手達と気軽に触れ合い、交流できる場所がいいなと思っていました。その頃、トップチームの選手からもらったシューズケースは未だに使っています。今、自分が同じ舞台に立てていることが、すごく嬉しいです。

Q3. 自身のプレイスタイル・強み

ポジションは「フィクソ」。サッカーで言うディフェンダーで、ゴールキーパーと連携した守備が役割です。自分より大きな選手に体を当ててボールを奪ったり、決定的なシュートを打たせないようにする、アグレッシブなディフェンスが好きです。

牧野選手サイン色紙を2名にプレゼント！

10/14までに応募ください！応募フォーム▶



Q4. プレーで大切にしていること

目の前の選手に負けないこと。後ろからチームを見て、全部自分がカバーするぐらいの気持ちで、何があっても失点しないことを心がけています。

Q5. 今後の目標

日本代表に入り続けること。難しいことですが、常に意識していきたいです。入れなくても、活躍し続けることで、愛川町出身の選手として、地元やお世話になった方々に恩返しできればと思います。

Q6. 子どもたちへのメッセージ

自分に負けないこと。遠くまで通ったり、辛い環境でも、何を目標しているか、何を大切にするかを考えて頑張ること。キツイし根性も要りますが、やり続けてきたから、今の自分があると思います！



牧野謙心選手
プロフィール



湘南ベルマーレ
フットサルクラブ



町出身！“Z世代選手”インタビュー スペシャル3

〇スペースの都合で誌面に掲載できなかった内容をWEB版に掲載しています。詳しくは▶